3人の盗賊

3人の盗賊

著者不明

「今の盗賊の問題は」と、レドスは始めた。「技術が足りないことだ。今も昔も盗賊に名誉なんてものがないのは分かっているが、昔は多少の誇りや技術、基本的な創造力はあった。我々のような歴史感覚のある者は絶望してしまうよ」

イマリンは鼻で笑い、荒削りのテーブルにグリーフの入ったフラゴンを乱暴に置いた。「どんな返事を期待している？ "衛兵に会ったらどうするか"と聞かれたら、答えは"そいつの背中を刺す"だ。お前は別の選択肢を選ぶのか？ 子供の遊びで対決しろとでも？」

「野心は大きいが、教養がない」と、レドスは溜息をついた。「親愛なる友よ、我々は船で来たばかりのノルド人の観光客を襲うわけじゃない。靴職人のギルドなんて大したことないと思ってるかもしれないが、今夜、集めた会費があそこに集められてから銀行に送られる。警備はクワマのケツの穴よりもきつくなるだろう。会った奴全員の背中を刺して金庫まで行くのは無理だ」

「はっきりとどうして欲しいか説明したらどう？」と、ガルシアが静かに尋ねた。大声でもめるのを避けるためだ。テル・アルンのプロット・アンド・プラスター・コーナークラブにいるほとんどの地元民は盗み聞きなどしないだろうが、どんな危険も避けるにこしたことはない。

「普通の盗賊は」と、レドスはグリーフを注ぎながら話に熱が入っていく。「ダガーを敵の背中に刺す。これで倒せるだろうが、悲鳴を上げる時間を与え、襲撃者を血まみれにすることがある。これではダメだ。きちんと上手く喉を切れば、衛兵を倒すと同時に黙らせることができ、盗賊は血をほとんど浴びずに済む。それに強盗に入った

後、通りを走る際に血塗れの姿を誰かに見られたくはないだろう。そんなことをすれば、テル・アルンでだって疑われ可能性が高い」

「相手が寝てるか休むかして横になっているところなら都合がいい。片手の親指を顎に当ててロを手で覆い、もう片方の手で喉を切って素早く頭を片側に向ければ血を浴びることもない。頭を動かすのが遅いと血が染みつく危険性がある。生きている内に刺すと血が1メートル近くは噴き出るため、不安ならそれを避けるために相手をまず絞め殺せばいい」

「私の良き友人で、名前は言えないがグニシスで盗賊をやっている者がいる。窒息させてから切る彼の技術には信頼を置いている。簡単に言うと、相手の喉を後ろから押さえて、絞めている間に顔を壁に叩きつける。そして相手の意識がなくなったところで、後ろから押さえたまま喉を切る。そうすれば服に血が飛び散る危険はほとんどない」

「もっと取っ組み合いが少なくて済む古くからの技は、相手のロを手で塞いで3回か4回、ヴァイオリンを弾くように喉を切る方法だ。これはほとんど労力を要さず、かなりの量の血が出るが、すべて前方に飛び散るため血を浴びることはない。」

「喉を切ろうとする者なら、予備の道具を持っていくくらいの予防線は張るべきだろう。私の知る限りで最高の首切り技術を持つ奴は、丸めた布をナイフの鍔元につけて血が袖口に付かないようにしている。今回のような仕事には実用的ではないが、相手が1人か2人の予定なら、標的の頭にずた袋をかぶせてひもをしっかり締めてから、滅多打ちにするのが1番だ」

イマリンは大笑いした。「そのうち実演を見にいってもいいか?」

「近いうちにな」とレドスは言った。「ガルシアの仕事が終わったらだ」

ガルシアは最近盗んだばかりのギルドの地図を持ち出し、作戦を詳しく説明し始めた。

それまでの数時間はめまぐるしく事が進んでいた。3人が出会い、計画を練って、必要な物を買うか盗み、実行しようとするまで1日とかかっていない。3人の誰もが、自分以外の2人を駆り立てているのは自信なのか愚かな考えなのか分からなかったが、運命は一緒だった。これからギルドを襲おうとしていた。

日が落ちると、レドスとガルシア、そしてイマリンは街の東にある靴職人のギルドに接近した。ガルシアは石の花のカシューを使い、欄干を通る際に番狼から匂いを隠した。彼女はまた、偵察の先頭を切って歩き、レドスを感心させた。比較的経験が浅い割に、彼女は闇にまぎれて進む方法をわかっていた。

レドスは何度もその専門技術を披露することになった。多様な衛兵がいたため、何年もかけて磨いた音を立てずに暗殺する方法を残らず見せることができたほどだ。

イマリンは独特の順序立ったやり方で金庫を開けた。タンブラーが彼の指の下に落ちると、ボエシアの99人の愛人を語る古くて下品な酒場の歌を小声で歌った。集中力を高め、難しい組み合わせを整理するのに役立つのだと彼は言った。数秒で金庫が開き、金貨が手に入った。

侵入してから1時間後にギルドを出た。警報も鳴らず、金貨は消え、中にある石床の血だまりには遺体が横たわっていた。

「良くやったぞ、素晴らしい。立派なもんだ」とレドスは言いながら、金貨がジャラジャラ音を立てて不自然な膨らみができないよう特別に仕立てられたチュニックの袖に金貨を入れていった。「明日の朝、プロット・アンド・プラス

ターで落ち合って山分けするぞ」

そして、彼らは別れた。最も見つかりにくい街の下水道を通るルートを知るレドスは、ダクトに滑り込んで消えた。ガルシアはショールを身につけ、顔を汚して年老いた占い師を装い北へ向かった。イマリンは監視の目をかいくぐるために、自分の類まれな感覚を信じて東の公園へ向かった。

さて、これから彼らに最大の教訓を教えてやろう、とレダスはぬかるんだ迷宮のようなトンネル内をバチャバチャと進みながら心の中で呟いた。街の門のところでグアルが待っており、繋いでおいたチョークウィードの低木を簡単な昼食にしていた。

ヴィベクへの道すがら、彼はガルシアとイマリンのことを考えた。もしかしたら既に捕まり、質問を受けたかも知れない。尋問に耐える姿を見られないのが残念だった。どっちが最初に重圧に屈するだろうか？ イマリンの方が間違いなく頑丈だが、ガルシアも恐らく何かまだ隠していた。それは単なる知的好奇心だった。2人は彼の名前がレドスで、プロット・アンド・プラスターで落ち合うものと思っている。だから衛兵が遠く離れたヴィベクで獲得した富を祝うセイシスという名前のダンマーを探しにくることはないはずだ。

日が昇り始める中、セイシスはグアルを急かしながら、ガルシアとイマリンが尋問を受けず、悪人として深い眠りにつき、どうやって分け前を使おうか夢見ている姿を想像した。2人とも起きたらプロット・アンド・プラスターへ急ぐだろう。イマリンが笑いながら騒ぎ、ガルシアが必要以上の注意を避けるためにイマリンを静かにさせる様子が目に見えるようだった。グリーフを2杯飲み、大盛りの食事を頼んで待っているかもしれない。だが、時間が過ぎるにつれて楽しい雰囲気も消えていく。裏切られた者なら誰もが見せる反応の連鎖だ。不安、疑念、狼狽、激怒。

セイシスがヴィベク郊外にある家の家畜小屋に着いた時、太陽は完全に昇っていた。彼はグアルを繋いで餌を与えた。他の小屋は空だった。使用人がグニシスの聖リルムズの祝祭から帰ってくるのは午後だろう。彼らは善人で、彼も良く扱っていたが、過去の経験から使用人は口が軽いと分かっていた。もし彼の不在を他の街で起こった盗みと関連付け始めたら、密告に行くか脅迫に来るかは時間の問題だ。結局彼らも人間だ。長い

目で見れば、街から出て仕事をする時には、1週間の有給休暇を与えるのが1番だった。

彼は金貨を書斎の金庫に入れて、階段を上がった。予定は詰まっていたが、使用人が戻る前にセイシスは数時間の休憩を取った。テル・アルンの小都で使わざるを得なかった酷い寝床に比べて、彼のベッドは素晴らしいほどに柔らかく温かかった。

セイシスは悪夢でしばらくして起きた。数秒してから目を開けても、まだイマリンがボエシアの99人の愛人を歌う声が近くで聞こえる気がした。彼はベッドに横になったままジッとしていたが、いつもの古い家が軋む音しかしなかった。午後の日差しが寝室に差し込むと、ホコリがキラキラと光った。彼は目を閉じた。

歌がまた聞こえ、セイシスは書斎の金庫が大きく開くのを聞いた。石の花の匂いが鼻に充満して目を開いた。午後の日差しがわずかに麻袋の内側に差し込んだ。

強い女性の手に口を押さえられ親指が顎の下に突き刺さった。彼の喉が切り開かれ頭を横へ押された時、ガルシアのいつもの落ち着いた声が聞こえた。「教えてくれてありがとう、セイシス」

3人の盗賊

FormId	skyrim.esm:01B276
Owning plugin	skyrim.esm
Local FormId	01B276
Editor ID	SkillSneak1
Inventory image	(none)
Menu art	HighPolyBookLarge01
Value (gold)	75
Type	Book or tome
Weight	1
Can be taken	Yes
Teaches	Skill: 隠密
Inventory description	(none)
Keywords	VendorItemBook, GiftThiefSpecial
Locations	6
Leveled lists	0
Scripts	0

© Bethesda Softworks LLC and the authors of the mods in the load order.
Exported and generated with SkyrimSourceExporter.